

普及が進むカーネーションの養液土耕栽培

はじめに

養液土耕栽培は、多肥栽培するカーネーションにとって、非常に合理的で省力かつ安価にできる技術として、ひょうご花のメロディー構想推進強化事業などを活用して淡路のカーネーション農家に急速に広まっている。

養液土耕栽培とは

従来の栽培畝に点滴チューブを2～3本敷設し、所定濃度に薄めた液肥を自動的に点滴施用する方法である。施肥灌水に要する労働時間が従来の約10分の1に短縮でき、反射マルチを張ることで高温期地温上昇をおさえられ、生育がスムーズになって2割程度の収量アップが見込まれる。コントローラーや液肥混入機など10a当たりの諸費用は約150万円である、点滴チューブと配管を追加することで、一つのシステムで最大50a程度の面積をカバーすることが可能である。最近では、小面積用の安価なシステムも発売されている。

淡路での普及状況

最初に導入されたのは、1998年度東浦町の1戸16a。淡路農業技術センターの研究成果を見て早速に取り組んだ。その後の導入経過は図のとおり。2004年度には、農家数、面積とも島内の約3分の1となり、主要な農家のほとんどが養液土耕栽培となる見込みである。

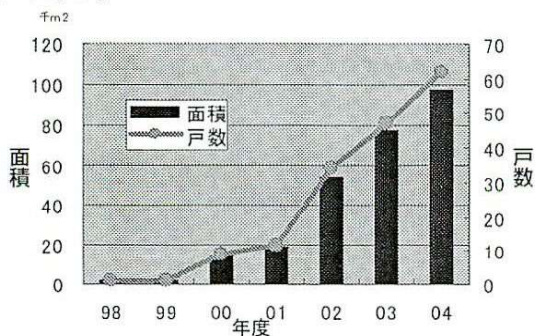


図1 カルネーション養液土耕栽培の推移

養液土耕栽培の効果と問題点

養液土耕栽培と従来の栽培を比較すると、エクセリアのように豊産性品種では、収量・品質ともさほど変わらないが、フランセスコのような中生品種では品質よりも収量の増加が期待される(表)。しかし、収量が増えても茎が細くなる傾向にあるので、むやみに切花本数を増やすことは危険である。養液土耕栽培は、カーネーションの生理によくあっているため、ややもすると生育が旺盛になりすぎて茎が伸びたり、がく割れを引き起こして、品質を悪くすることがある。機械にたよらず、天候や生育状況を見て操作する必要がある。

表 切花数比較 (P.フランセスコ)

	A 氏		B 氏	
	13年 (慣行)	14年 (養液土耕)	13年 (慣行)	14年 (養液土耕)
定植日	6月中旬	6月上旬	6月下旬	6月下旬
収穫期間	8/26 ～5/22	8/19 ～5/14	8/29 ～5/27	9/2 ～6/3
切花数 (本/坪)	677.0	676.0	667.0	734.2

おわりに

普及センターでは、養液土耕栽培導入をきっかけに新技術栽培研究会を組織し、定期的な研修会や関係機関による指導チームを結成して巡回指導を行い、技術向上を図っている。

古地哲弘 (北淡路農業改良普及センター)



図2 指導チームによる巡回指導

ひょうごの農林水産技術 No.133

平成16年5月1日 (隔月刊)

兵庫県立農林水産技術総合センター (0790) 47-2400

1部250円 (申込先・県立農林水産技術総合センター)